

Henry James と Joseph Conrad

—両作家の文学観と小説技法を中心にして—

析 原 知 雄

I

James 文学の特質と諸作品を論述してきたので、今回から James に関係の深い作家達について考察をしてみたいと思う。作家が作家をみる鋭敏さは、作家の批評家としての目から生れるばかりでなく、作家の創作家としての心から頼に生れるもののように思われる。James に関係のある先輩、後輩の作家は少くないが、先づ Joseph Conrad をとりあげる。この両者には親交があったし、お互の文学をよく理解し合った。殊に Conrad は James を尊敬し、James に対する傾倒ぶりは実に圧倒的だったとさえ言える。この事は両者の書簡中にも現われるが、特にその作家論として書かれた両者の論説を読めば明らかになる。その作家論とは、Conrad が、1905年に“North American Review”に掲載した“Henry James—An Appreciation”¹⁾と、“The New Novel” (1914年)²⁾に含まれた James の Joseph Conrad 論とである。先づ Conrad の James 論をとりあげる。Conrad はこの鑑賞論の最初に“The critical faculty hesitates before the magnitude of Mr. Henry James’s work.”と書いているが、Conrad のような作家ですら James 文学の竜大さの前には、批評能力の働きのためらうと述べていて、James に関する「一つの鑑賞論」と言う表題をつけたのであろう。

Conrad は James の“*Inspiration*”の豊衍さを讃美する。即ち、“The stream of inspiration runs brimful in a predetermined direction, unaffected by the periods of drought, untroubled in its clearness by the storms of the land of letters, without languor or violence in its

force, never running back upon itself, opening new visions at every turn of its course through that richly inhabited country its fertility has created for our delectation, for our judgment, for our exploring. It is, in fact, a magic spring.”³⁾「靈感の流れと言うものは、前もって決められた方向に一杯に流れるものであって、旱魃の季節にも涸渇しない、文学の地に吹き荒れる暴風雨にも混濁しない、力の衰弱をみせない、暴力をふるわない、逆流しない流である。その流れの彎曲部では新しい光景を展開し、その流域は豊饒で肥沃、歓喜を求め賢明な判断をする言わば魔法の泉である。」と、James の“*Inspiration*”を讃美する。

小説の芸術家と言うものは、人間の行動を死滅の運命から救い上げて、それに不滅の光をあてるのだが、James は正しくこれを成し遂げたのである。しかも、James は情況 (“*circumstance*”) と性格 (“*character*”) を創作し、表現の困難に打ち勝って、この“*Inspiration*”を現実の形態と感動のうちに発見する想像力の豊さをもっている。この表現のためには犠牲が伴うものであり、同時に何かを切り捨てなければならない。そして後、すべての冒険、すべての愛、あらゆる成功は自己放棄と言う行為の最高のエネルギーの中に取り返すものである。“All adventure, all love, every success is resumed in the supreme energy of an act of renunciation”⁴⁾ この放棄の力は、人間の総計であって、自然の力が複雑多岐な現象に拡散する時に、力が衰弱すると同様、人間の行動力は、人間の動機の錯綜とそれにつきまとう様々な妥協によって衰弱する。そして、James は人間の行動を“*round*”に描いたと Conrad は称賛する。人間は人間であって、James の描いた人間

は正に人間と言う名に値する人間であり、James が人間以上のものを自分の描く人物に要求する様な作家ではなかったと考察を下すのである。この放棄、或は自己犠牲の中に至高の正義が常に存在すると言う人間観と文学観は James と Conrad の共通の見解であって、ここから人間関係が生れる。James の小説芸術はこの人間関係を追求するものだと言ふ。Conrad は言う。この人間関係を追求する小説芸術については筆者の見解を既に詳しく論述しておいた。⁵⁾

一般の小説では、因果応報 (“rewards and punishment”) があり、愛の凱歌 (“crowned love”) があり、幸運 (“fortune”) があり、挫折か突然の死 (“a broken leg or a sudden death”) があって小説が完結するのが普通だが、James の小説は、このように完結するとは言えない。これは James の作中人物が (殊に中心人物) が、放棄、或は自己犠牲を敢行するからである。そして、James 論の最後を次の言葉で述べる。“Mr. Henry James, great artist and faithful historian, never attempt the impossible.”⁶⁾ で結んでいるが、これは James 論中 Conrad が述べた次の部分と対応するものである。“Fiction is history, human history, or it is nothing. But it is also more than that; it stands on firmer ground, being based on the reality of forms and observation of social phenomena, whereas history is based on documents, and the reading of print and handwriting — on second-hand impression. Thus fiction is nearer truth. But let that pass. A historian may be an artist too, and a novelist is a historian, the preserver, keeper, the expounder, of human experience. As is meet for a man of his descent and tradition, Mr. Henry James is the historian of fine consciences.”⁷⁾

II

Joseph Conrad は小説芸術に関しては、不断の実験家であって、H. G. Wells も指摘したように、小説芸術においては、James と同じカテゴリ (category) に入る作家で、芸術的先入主 (“preoccup-

ation”) をいっていた作家だと言えるかも知れぬ。小説の技巧については常に実験的であった。前述のように、James と Conrad にとっては小説は特に人間関係を追求する芸術なのだが、先づ作家は一誰にもまして強い自己意識をもつ作家自身は一複雑な人間関係から自己を解放してかからねばならないのである。人間愛憎を客観化して、人間愛憎の泥沼から浮び上がり、しかも自己意識からのカタリシス (catalysis) を果さねばならない。Conrad が James 論中に述べているように小説の読者は「私から私自身をとり去ってもらいたい」 (“Take me out of myself”) のであって、この意味は前述のように人間の行動を死滅の運命から救って懲しいことなのである。だが、あらゆるものが相関的である。意識の光、或は不滅の光のみが、人間の手でつくる短命なものに較べて滅亡しないものと考えられる。

Conrad は James 論で、James の文学の特質を解明したばかりでなく、そこに自分の文学観をも展開することになったのだが、それより前1897年に “The Nigger of Narcissus” の序文の中で、文学観を展開する。“Fiction—if it at all aspires to be art—appeals to temperament. And in truth it must be, like painting, like music, like all art, the appeal of one temperament to all the other innumerable temperaments whose subtle and restless power endows passing events with true meaning, and creates the moral, the emotional atmosphere of the place and time.”⁸⁾ と述べているように、効果的に読者に訴えるためには、感覚を通して伝達されるあざやかな印象が大切であると述べる。気質、それが個人的なものであろうと集団的なものであろうと、説得し易いものでなければならぬ。芸術は第一に感覚に訴えるもので、書かれた言葉で表現する場合、最高度の望が感応し易い情緒の泉に達するもので、あらゆる感覚を通して訴えるものである。従って、Conrad は自分の小説芸術の目標を次のように述べるのである。即ち、“My task which I am trying to achieve is, by the power of the written word to make you hear, to make you feel—it is, before all, to make you see. That—and no more,

and it is everything. If I succeed, you shall find there according to your deserts: encouragement, consolation, fear, charm—all you demand—and, perhaps, also, that glimpse of truth for which you have forgotten to ask.”⁹⁾ このような Conrad の文学観を読んでみると事実 James が直面していたと同様の芸術的な問題に気づいていた事がわかる。James の小説芸術観と甚だ共通点が多い。小説の適切な形式において、人間意識の無数の形式を伝達すると云う根本的な問題であった。「見えないもの」(“the unseen”) を喚起させるのが小説の技法の唯一の目的と考えるのである。Conrad は小説家としての最後の日まで、James と同様、慎重で思慮深い芸術家であった。そして自分の芸術の効果を絶えず計算していたのであった。小説家の仕事と言うものは、Conrad が悟ったように、人生を的確に又精密に伝達すべきもので、人生に関する自己の直観的透察力によって、真に迫った人生の姿を伝達すべきものなのである。Conrad は芸術家というものは基本的に「見る人」であって「論ずる人」であってはならぬと示唆するのである。“temperament” を重視した芸術の形態感は、Virginia Woolf の小説観ともよく似ている。この種の小説家は努めて自己の明確なそして的確な言葉で表現しようとする。自己の感情を弁明したり弁護したり、又自己の思想を読者におしつけたりするような型の作家があるが、James も Conrad もこの種の型の作家を好まないのである。両者とも先づ芸術家でありたいと考える。小説は何よりも芸術でなければならぬと考える。偏見、意見、観念などは総じて作家と読者の間に割れめをつくる傾向がある。小説家は自己をそして自我を小説芸術の世界から取り去るべきであって、その結果、はじめて、読者と作家が創作された世界において完全な同一状態が発生する可能性を生むことになるのである。Conrad にあっては、それだから “to make you see” と言うことが重大であったのである。ただ、しかし、Conrad の作品を読んでわかるように、この Conrad の文学観が見事に果せたこともあるし、成功しない作品もあった。けれども Conrad は、このむずかしい仕事と取り組んだのであった。

III

ここで、Conrad の人物描写、或は、性格描写 (characterization) について考察しよう。作中人物の描写については普通三つの方法が考えられるであろう。即ち、作中人物を憎悪 (hatred) と侮蔑 (scorn) の対象としてあつかうこと、又、それと反対に同情 (sympathy) と憐憫 (pity) の対象として描くこと、そして最後に人物を客観的 (objectively) に冷静に (dispassionately) に描くことである。第一、第二の方法は小説においては伝統的で極普通の方法であったのだが、James や Conrad はこれらの方法をなるべく切り棄てて、第三の方法と取り組もうとした。この小説技法については、James も Conrad もフランスのリアリスト達の小説技法 (特に Flaubert や Maupassant から) 学び取ったものが少なかったであろうが、しかし、両者とも自己独特の技法に発展させて行ったと言えよう。その一つとして、James は “confidante”¹⁰⁾ の設定を、そして、Conrad は「語り手」を設定した。James の “confidante” については筆者は度々今までに論述したことがあったので、今ここでは、Conrad の「語り手」に注意を向けることにしよう。Conrad の読者のよく知るように、“Marlow” と言う人物の設定である。この Marlow が Conrad の人物の性格描写と物語りの技法を解く鍵となることさえある。読者の知るように、Conrad の小説は、その技法として、作家自身が語る場合も少くないが、特定の語り手に、全体又は一部を語らせる方法を取る。Marlow はその代表的なもので、この他にも “Nostromo” (1904年) の Captain Mitchell もそうであり、“Amy Foster” (1901年) の Kennedy, “Chance” (1912年) の Powell, “Under Western Eyes (1911年) の語学の教師, “The Heart of Darkness (1899年) の船長, “The Secret Sharer” (1909年) の船長、等特定の語り手である。そして、語り手が自分で観察したことを自分の口から語る場合と、Marlow が語った事を聞いた「私」 (“I”) が記録する場合とがある。Conrad がこの方法を採用する目的の一つは読者に信頼感を与えるためであろう。即ち、事件があった現場にい合

わせた人物、或はその人物の話を聞いた人物に語らせることは読者に信頼感を与えるからである。だが、しかし当時の読者には変化のある技法と思われただろうが、今日の小説の読者には、必ずしも、その設定自体に興味をひきおこすとは限らないであろう。この方法がうまく行けば、作者自身が全知 (the Omniscient Viewpoint) の視点を通して語るよりも人物や事件の注釈が読者の理解を自然に助けることになるであろう。

“Lord Jim”(1900年)の語り手 Marlow が読者の頭を働かす余地を与え理解を助けているのは技巧の成功した例である。“Chance”(1912年)の Marlow より語り手として更に成功したのは、語り手が只単に傍観的な立場で語らないで、Jimの父の立場にいるように語り手が親近感をいだいた事によって、事件から受けた影響を直接受けとめたためである。Jamesの“confidante”にはこの種の作中人物が応々活動する。とにかく或る視点を持つ作中人物に「物を見させる」ことは読者に知覚の過程を再現するのに効用があると言えるだろう。“Chance”や“Youth”の Marlow は作者 Conrad の分身 (alter-ego) とさえなる。Conrad は自己の小説作品を出来得る限り全体的に統制し、丸彫りにして提示しようと努力をした。この点も James に甚だよく似ていて、同時に人間性 (human nature) の神秘に甚だ深い関心をもったのである。整然として一貫性を失わず多くの「視点」を利用しようとした。種々様々な角度からみられた絵を構成しようとしたのである。本質的に異なる (或は全く共通点のない) 素材から統合を試みようとした。更にこの人生において異質な素材を統合するため物語りを三人称で進める方法を取った。“Lord Jim”の場合も最初の3章は三人称で語られ、4章から36章までは、物語りは Marlow が彼の友人達に食後の休息時に語られることになっている。Marlow によって書かれた残りの章は London にいる Marlow の友人の一人によって読まれることになっている。“Chance”では Marlow は最初から Flora de Barrel そして彼女の不正直な父、Mrs. Fyne の家からの駆落ちについての物語を Captain Anthony や Mrs. Fyne's brother と関係づけて語る。Marlow 自身は Mr. and Mrs. Fyne や Flora や Powell から情報を集め

るのである。かくして物語りの事件や人物達は多くの人物を通して読者に語られることになる。

しかし、Conrad の技法への努力にもかかわらず、人物達が、ことごとく、完全に、客観的に描かれたとは言いがたいため、例えば Flaubert の Emma や James Joyce の Leopold Bloom のようには行かなかった点があるだろう。人物の内部を深く描く方法は20世紀新心理主義作家の仕事となったのである。この点、Conrad の方法は Joyce の方法と比較すれば、はるかに“simpler”だと言えるだろう。Conrad にも人物を内部から、特に心理的な面から描こうとした作品“The Return”(1898年)もある。そしてこれは James の作品と比較対照する場合甚だ興味あるものだと筆者は考えているが、Conrad は二度とこの種の作品を書かなかった。友人の Edward Garnett から好意ある批評を受けなかったためばかりではなかったろうが、二度と人間心理の動きを内面から描写する作品を手がけなかったのである。筆者はこの事を惜しい事だと思っている。だが読者は Conrad の描く人物が読者の眼前に人間の内なる心が裸にされて示現されていることに注意を払わねばならぬと思う。Conrad は人物を外側 (outside) から描いているようにみえても読者が各人物のカラーを生き生きと見ることが出来るように描こうと努力している。所謂、“interior monologue”で示現しようとしなが、それが外面からであっても、鋭く輝かしく、色調の明るいイメージ (像) となるように試みたのである。

IV

James と Conrad の文学観と小説技法を両者を対照しながら論述して来たが、James に関するよりも、Conrad に関して多くを述べて来たのは、James の文学に関しては度々論述を重ねて来たからであった。しかし、ここで少し James の文学にふれる。Dorothy Richardson は James の小説作法においては満足すべき完全さがあると称賛する。殊に“The Ambassadors”(1903年)を高く評価する。この James の作品は James 自身が“The New York Edition”の自序に“quite the best, ‘all round’, of my production”と認めた

もので後期の作品中でも James の小説技法を充分活用したものであった。Michael Swan¹¹⁾ は James の初期の作品 “Roderick Hudson” (1876年) が、既に小説家の「永久の問題」と考えられるものを発見していると褒める。James の文学観と小説作法に関する見解は “The Art of Fiction” (1888年)¹²⁾ に展開されていることは読者の知るところであって、この中でリアリズムと小説技法との関係を明確に論述している。“reality” と言うものは “myriad forms” をもつもので、“experience” と言うものは意識の部屋 (“chamber of consciousness”) の中にある “myriad forms” に見出せるものだとして James は述べる。そして、小説を書くに当って、成功への道は “selection” にあると言うのである。James が常に提唱したことは、「芸術はすべて識別 (discrimination) と選択 (selection) である。」と言うことであった。常に不細工なのが人生であり、人生は包括 (inclusion) と混乱 (confusion) である。芸術家である James は「不恰好な附加物をきれいさっぱりと洗い去って、聖らかな固さにくたえあげる」と言うのである。“Art is essentially selection, but it is a selection whose main care is to be typical, to be inclusive. For many people art means rose-coloured window-panes, and selection means picking a bouquet for Mrs. Grundy. They will tell you glibly that artistic considerations have nothing to do with the disagreeable, with the ugly; they will rattle off shallow common-places about the province and the province and the limits of ignorance. It appears to me that no one can ever have made a seriously artistic attempt without becoming conscious of an immense increase—a kind of revelation—of freedom. One perceives in that case—by the light of a heavenly ray—that the province of art is all life, all feelings, all observation, all vision-----” これは James の小説家としての声明とも言える。すべての人生は James にとって小説の主題であった。すべての人生とすべての経験は、小説家にとって型どることの出来る柔軟な素材であるが、James にとっては、そこから創り出されるものは

完全無欠なものであらねばならなかった。小説家の芸術と画家の芸術とはよく似たもので、小説は一つのくすくすしない印象であり、人生 (human life) の解釈である。小説は人生の啓示でもあらねばならぬ。物を見る目は人生の外面を通してみ透さねばならぬ。そしてそれを記録し描写する作家の手は常に過程と構成と技巧に優れたものでなければならぬのである。R. P. Blackmur が “The Art of the Novel” by Henry James¹³⁾ の “Introduction” 中で述べているように、多くの読者には、文体において、人生において、James の性格が強く圧倒的なので、甚だ特異なものと思われる。筆者も度々論述を重ねたように、文体は甚だ精巧で手の込んだ蔭影のあるものだし、James の創る人物の中には一般の読者には、その人物が、時につむじ曲りとさえ見え、その人物の行動も普通人には、時に横紙破りとさえみえる。“Jamesian heroines” は James の理想の人間像となる。Milly Theale も Isabel Archer もそのような人物の代表的なものである。“beautiful” で “charming” で “moral” である。“The Portrait of a Lady” 中に James が Isabel Archer のことについて次のように述べているのは読者のよく知るところであろう。“She spent half her time thinking of beauty, and bravery, and magnanimity; she had a fixed determination to regard the world as a place of brightness, of free expansion, of irresistible action-----She had an infinite hope that she would never do anything wrong.” このように理想の女性像となる。作者 James にとっては、読者に Isabel のもつ自覚意識の完全な啓示を受け取ってもらいたいのである。“The Portrait of a Lady” の序文でも述べているように、この小説の主題の中心が運命と面とむかう若い女性の理想にあったからであろう。James の描く “freedom-loving human characters” は豊衍な人生のために「自由精神」の旅程を続けようとする。¹⁴⁾ そしてその多くは人間の世界において不幸に終る。“Roderick Hudson”¹⁵⁾ の Rowland Mallet, “The American”¹⁶⁾ の Christopher Newman, “Daisy Miller” の Daisy Miller, “The Princess Casamassima” の Hyacinth Robinson, “The Spoils of Poynton”¹⁷⁾ の Fleda

Vetch 等、人生旅程では悲劇に終る。

V

James の場合も、Conrad の場合も、作中の中心人物は多くは人生の旅程で悲劇に終る。そして人物達は自己放棄或は自己犠牲を敢行する。ここでその代表的な例を一つづつあげることにしよう。Conrad から “Victory” (1915年) をとってみよう。第一部で「私」(“I”)と語り手を通して主人公 Axel Heyst の経歴と輪郭が語られる。Heyst の人間の全貌がようやく明かになった第三部では父の影の下に生きている Heyst の姿をみる。父は Heyst に、決して人生と言う盲目の渦に巻き込まれてはならない、「ただ眺めておれ、騒きたてるな」と教えた。父の「人生のめぐらす策略のうちで、最も残酷なのが愛の慰めである。」と言う思想が、今もなお Heyst を支配していた。Heroine の Lena と Heyst の邂逅と、Lena の生き方に興味を感じる読者が多いだろう。Heyst を救うために自己放棄を敢行した Lena の胸を弾丸が貫いた。けれども、Heyst の無事な姿を見た Lena はうれしきで胸が一杯になる。自分が撃たれたことさえ気づいていないのだ。Lena は「生」に身を捧げたのである。それは Lena の勝利の象徴であったのである。Conrad は “Victory” の “Note” の中で “A sense of infinite littleness” という見事な表現を用いているが、この自分自身に対する無限の卑少感の自覚は放棄の意識に徹した時、同時におこる。“Victory” (勝利) とは、自分自身の卑少な生命を勝利に転化しようとする人間の力の勝利とも言える。「Lena の全精力は、自分が身にひき受けようと決意をした努力に集中された。それは高揚された愛と自己犠牲の心から生れたものであり、これこそ女性の崇高な能力なのである。」 (“---all her energy was concentrated on the struggle that she wanted to take upon herself, in a great exaltation of love and self-sacrifice, which is woman’s sublime faculty; ---”) Lena が弱い女の体を張って、生の意識に絶望した Heyst のために自分を犠牲にした自己放棄もこの現実では実を結ばず、Heyst の社会復帰もならずその生命を絶つのである。

James の後期の傑作の一つである “The Wings of the Dove”¹⁸⁾ の Milly Theale の自己放棄の行為もこの現実では実を結ばなかった。Kate は、Densher に向かって「milly があなたを愛しているから親切にしてあげて下さい。」と思ひもよらぬことを言う。実は Milly が不治の病にかかって余命いくばくも無いことを知っているのだから、Densher が Milly を愛することで莫大な Milly の財産を Densher に残させ、そのあとで Densher と財産をこっそりわがものにしてやろうと企んだのである。ところが Lord Mark は Kate に求婚をこたわられて、腹だちまぎれに Kate の企みを Milly に話すのである。だが、Milly はこの事を聞いても、泣きもしないで、只顔を壁の方へ向けるだけであった。そして遂に Milly は Densher に財産をことごとく残して死ぬのである。

「あなたが、Milly さんの思い出を愛していないとお誓いになることですよ。」

「ああ、Milly の思い出か！」

Kate は激しい意志表示をした。「ああ、愛していないなんておっしゃらないで。あたしだったらできてよ。あなたは Milly さんの思い出で生きられる方なんです、Milly さんの思い出を愛していられっしやいます。思い出の外にはなにもいらぬのです。」

Densher は Kate の言葉を身じろぎもしないで聞いた。それから Densher はこう言っただけだった。「さて、僕は一時間もしたら君と結婚をするよ。」

「以前のままで？」

「そうだよ、以前のままで。」

だが、Kate は戸口の方に顔を向けて、頭を振った。「あたしたちは、もう決して以前にはなれません。」

こうして “The Wings of the Dove” のラスト・シーンは終るのである。

文学観の中核に “renunciation” の理念があり、しかもそれが両者の文学を解明する鍵であるとも考えられる。“the supreme energy of an act of renunciation” は人間の力の総計であって、この中に至高の正義が存在するものであると言うところに James の文学観と人生の生き方の根底があると言えるだろう。

小説芸術と言うものは、人間の意識と感情を対象の主なるものとするだけに、対象と作者自身との間に一定の距離を保持し、特定の視点を設定しなければならぬのである。そこに小説技法の重要さがあるので、作家が描く対象から作家自身に関与することを徹底的に放棄することが必要な訳である。作家自身を含めた一般社会（或は通俗社会）と作家自身との絶縁を計らねばならない。James の作中人物がかたどる人間像は自己の生き方が現実の社会（通俗社会）においては喰い違いをきたすことに焦慮する。James の人物は低俗な社会の影響を受け易い状態の不利を除去しようとする。如何なる時においても、如何なる場においても、高度な情緒の秤によって、低俗な情緒に打ち勝とうとする。生活の芸術とでも言うべきものに献身的となる。人生のゲームにおいて、他の競技者とゲームをしても高点を獲得しようとして、むやみやたらと争わない。他人を打ち負かして利点を占めようとししない。人生ゲームの賞金は「美しい」(“fair”)人間関係を保持する行為そのものなのである。“fair”な“player”となることである。放棄の意識は、自分自身をみつめるギリギリの所から生れる。自己を切り棄てて、人間が最も神に接近する地点から生れるとも言い得るであろう。

VI

James が1843年生れで、Conrad が1857年生れだから James の方が14才ばかり年上であり、他界したのも James (1916年死去)の方が Conrad (1924年死去)より8年程早かった。両者がお互の作品を厚意をもって読んだことは両者の書簡、その他の文献から明白であり、James に敬意を表していたことは前述の通りである。又 James も Conrad の文学を高く評価していた。その一例をここにあげておこう。即ち、1906年11月1日付の James から Conrad への手紙の中に次のような James の言葉が書かれている。“No one has known—for intellectual use—the things you know, and you have, as the artist of the whole matter, an authority that no one has approached.”¹⁹⁾ James が “The Golden Bowl”

(1904年)を書いた頃に、Conrad は “Nostromo” (1904年)を書いている。Conrad の “Lord Jim” (1900年)と “Typhoon” (1901年)は James の “The Wings of the Dove” (1902年), “The Ambassador” (1903年)より少し前に書かれている。James が老衰して未完の “The Ivory Tower”, “The Sense of the Past” を書き続けていた1914年頃には、Conrad は元気に書き続けている。即ち, “Street Agent” (1907年), “Under Western Eyes” (1911年), “Chance” (1912年), “Within the Tides” (1915年), “Victory” (1915年), “The Arrow of Gold” (1919年), “The Rescue” (1920年) “The Rover” (1922年)と書き続けていたのである。

James も Conrad も英国に帰化した。James は死去1年前1915年に、Conrad は1886年に帰化している。けれども James が永住する積りで、London へ居を移したのが1876年の冬であったから、James の方が10年程英国の風土に長く親しんでいる訳であって、それ以前にも James の方は度々英国に旅行してその風俗習慣にも慣れていた。7才の時母に、12才の時父に死別したポーランド人の Conrad は17才で海員生活に入る。正確に言えば、1874年12月から1894年1月までが Conrad が地上の一般社会と隔絶した海員生活の期間であった。James の生い立ちと生涯については筆者は度々詳細に書いたのでそれにゆずることにするが、²⁰⁾ 1876年 (James 33才) の頃、James はヨーロッパに永住する積りで、(それまで度々ヨーロッパの各地を旅行しているが) フランスへ向って母国アメリカを去ったのである。生い立ちと経歴とはこの両者は異っているが、“Expatriate”或は “Exile” という点では全く共通なところがある。James は母国アメリカの社会生活と離れたし、Conrad は母国とも、地上の社会生活とも離れて海上の別世界に月日を過した。海員生活の人間関係は特殊なものと考えられる。人間の緊密な理解は育ちにくかったから、この点で、Conrad は孤独であったに相違ない。James は一生結婚しなかったが、Conrad は妻帯もし子供も持った。病身であって良妻とは言い難い妻を Conrad は愛したそうだが、そして家庭生活を持ち得たが、Conrad が孤独でなかったと言い得るだろうか。妻帯

は勿論せず、若い頃にも恋愛事件と言う程のものはなかった James, 強いて言うなら従妹の Mary (Minny)²¹⁾ とのはかない恋愛、恋愛と言うより深い友情、永遠の友情とでも言うべき Mary を母国アメリカに残して、一人文学を唯一の友として異国の土地で過した James が孤独でなかったと言えるだろうか。両作家ともイギリスにおいてはやはり “stranger” であり、両者ともそれを感じとった事であろう。このことは両作家が “outsider” の立場をとらざるを得なかったろうと思われる重大な原因の一つとすることができる。海員生活と言う特殊な人間関係を経験した Conrad と又33才以後は母国のアメリカ人よりも他国人と個人関係が多かった James の二人が他国人と緊密な理解が育ち難いものであったのは当然で、この二人が孤独であったことは容易に推測できるのだが、この二人にとってこのことは却って作家としての芸術的要請に積極性を与えたと言い得ると思う。T. S. Eliot の二つの James 論 (1918年に発表した “Henry James” 論と、1924年に “Vanity Fair” に発表した “Henry James” 論²²⁾) はこの問題を深く考察したものである。James が、“expatriate” としての James が)、アメリカをすててヨーロッパに就いたことは、Herbert Read²³⁾ が論述したように、無知な行動でもないし、又勿論、精神的な墮落でもないものであって、Brooks の見解とは反対に単なる巡礼のさすらいではなく、落ちつくべき伝統の栄光の中に落ちついた完成の道であったわけである。勿論、James の放棄と Conrad の放棄とが同質のものではないが、両作家の経歴の中に、その経歴、その人生経験のために却って、自己を保持することが出来たのは両作者にとって恵まれた条件であったときえ言えるだろう。Conrad が、放棄の構想を先輩 James の中に見出して述べた言葉をあらためて引用すれば「すべての冒険、すべての愛、あらゆる成功は自己放棄と言う行為の最高のエネルギーの中に取り返すものなのである。」しかも、最も潜在力のある効果的な力であって、この力が James の両洋にまたがる小説芸術をその上に打ち立てた岩なのである。

“The Free Spirit” の著者 C. B. Cox が、James の小説を “the art of personal relationship” と名づけたのは慧眼である。James の小説

技法は一言で言えば、この人間関係を探究するところから生れるのである。James の技法は説明と表現を媒介に意識を常に展開する。James 自身はこのことを “the revelation of the story” と呼んだのである。小説は人生を表現するもので、人生はすべて小説の主題である。従って、Conrad が James を “the historian of consciences” と呼んだことは適当であった。芸術家の大切な仕事は「見る」 (“to see”) ことであって、「論じる」 (“to reason”) ことではないのである。両作家は中心人物と中心事件に出来るだけ多くの鏡をあてようとする。それ故に James と Conrad の読者はこの両作家の “footsteps” に出来得る限りついて行かねばならないのである。
(1967.3.30)

- 註 1) (a) “Notes on Life and Letters” by Joseph Conrad. (J. M. Dent and Sons LTD., 1921)
(b) 入手し易い版は、“Henry James—A Collection of Critical Essays” Edited by Leon Edel. (Prentice-Hall, Inc, Englewood Cliffs, N. J., 1963)
- 2) 入手し易い版は、“Henry James—The Future of the Novel” Edited by Leon Edel. (Vintage Books, New York, 1956)
- 3) 註 1) (b) p. 12.
- 4) 註 1) (b) p. 17.
- 5) 拙稿「ジェイムズ文学における「自由精神」の問題——個人(人間)関係を探究する小説芸術——」(関西学院大学「論攷」第13号, 1966)
- 6) 註 1) (b) p. 15.
- 7) 註 1) (b) p. 15.
- 8) “Conrad’s Prefaces” Edited by D. Garnett, 1937. pp. 51-52.
- 9) 註 8) と同頁。
- 10) (a) James の作品論に関することごとくの拙稿でこの問題にふれた。
(b) James の “confidante” について詳しい研究は、(“The Confidante in Henry James” by Sister M. Corona, O. S. U. University of Notre Dame Press, 1963.) がある。
- 11) (a) “Henry James” Bibliographical Series of Supplements to ‘British Book News’ by Michael Swen, 1950.
(b) “Henry James” (The English Novelists Series) by Michael Swan, 1952.
- 12) 註 2) と同書。
- 13) “The Art of the Novel” Critical Prefaces by Henry James with an Introduction by Richard P. Blackmur. Charles Scribner’s Sons, 1950.
- 14) 5) の拙稿を参照。
- 15) 5) の拙稿を参照。
- 16) (a) 5) の拙稿。

- (b) 拙稿『『アメリカ人』をどのように読むか——初期 Henry James のロマン主義と清教主義——』（関西学院大学「論攷」第7号，1960.）
- (c) 拙稿「Henry James 国際的テーマ小説の問題点——1871——1881年間の作品と作風——」（関西学院大学「論攷」第8号，1961.）
- 17) 拙稿「Henry James 作 “The Spoils of Poynton” 論——人生と芸術・いかに生きるか——」（関西学院大学「社会学部紀要」第7号，1963.）
- 18) 拙稿「Henry James と Mary (Minny) Temple——H. James の生涯と作風——」（関西学院大学「英米文学」Vol. VI, No 1, 1961.）
- 19) “The Selected Letters of Henry James” Edited with an introduction by Leon Edel, New York Farrar, Straus and Cudahy, 1955. p. 157.
- 20) 拙稿「Henry James 1843——1881——James(前期)の生涯と作風——」（関西学院大学「社会学部紀要」第3号，1961.）
- 21) 18) の拙稿に詳しい。
- 22) 拙稿「ジェイムズ文学における題材と手法の問題——T. S. エリオットのジェイムズ論と関連して——」（関西学院大学「論攷」第11号，1964.）
- 23) “The Nature of Literature” by Herbert Read. Grove Press, Inc. New York. pp. 354-368.